

箴言18章10節 「やぐらなる御名」

1A 霊の戦い — 落胆

1B 人間関係

2B 生活の困難

3B 内なる葛藤

2A ヤハウエの名

1B 「ヤハウエ・イルエ」

2B 「ヤハウエ・ニシ」

3B 「ヤハウエ・シャロム」

4B 「ヤハウエ・ツイドユケヌ」

5B 「ヤハウエ・シヤマ」

3A イエスの御名

本文

箴言 18 章 10 節を開いてください。私たちの聖書通読の学びは箴言 15 章まで来ましたが、午後礼拝で16章から19章までを読みたいと思っています。今朝は、18章10節に注目します。「**主の名は堅固なやぐら。正しい者はその中に走って行って安全である。**」

当時、聖書が書かれていた社会では、町は必ず城壁に囲まれていました。この地上に住むということ自体が、外敵との戦いがあることを意味していました。そしてやぐらは、石や煉瓦で作られ、戦いの備えのために町や、戦略的なところに立てていました。そのやぐらをとてつもなく大きく造ることもあり、敵からの攻撃が激しくなると、町中の人が入り込んで避難することもしました(士師 9 章 46-52 節)。ですから、ソロモンが「堅固なやぐら」と言った時に、それを読んでいる人はすぐに分かりました。けれども彼は、「主の名」すなわち、ヤハウエの名が堅固なやぐら、と言ったのです。神の御名の中に入れば、激しい戦いの中でもどうも勝ち目がないと思う時、その逃げ込んで来て、安心であるということです。

1A 霊の戦い — 落胆

私たちも、当時の人たちのようにこの地上で生活すること自体に、敵からの攻撃にさらされます。生活の中で絶えず圧迫やストレスを受けながら暮らしています。そして、それらは目に見えるところで起こっていることなのですが、実はその中で背後に闇の力、悪の勢力の目に見えない力が働いています。そして、いろいろ自分の生活の困難に自分で対処しようとするのですが、どうも自分の理解を越え、自分の力をはるかに越えたところにその力があることを発見します。そして、私たちは落胆、落ち込み、不安と戦うことになります。そして、それがしばらく続くと、「疑い」が生じます。その疑いを悪魔にさらに利用されて、神ご自身への疑いにもなりかねません。

パウロは、エペソにある教会の人々に、こうした目に見えない悪の勢力がいることを教えました。「エペソ 6:11-12 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」ヨブにふりかかったことを思い出してください。神がサタンに対して、彼の財産にそして彼の体に触れてよいという許可を出されました。それによって、あらゆる猛攻撃がヨブの身に襲いかかりました。同じように私たちの生活にも、起こっている困難や圧迫には背後の敵の策略があるのです。そしてそれらは、私たちのできる範囲を超えてしまっています。しかし、「私には到底できない。」と気づくことは大事です。いや、気づかないといけません。実は、気づいた時に神がしてくださるという勝利を体験する第一歩となります。

1B 人間関係

私たちは、そうした霊の戦いを人間関係の領域で見ます。イエス様が十字架に付けられる前夜、捕えに来た者たちに対して、「今はあなたがたの時です。暗やみの力です。(ルカ 22:53)」と言われました。イエス様が十字架に付けられる道、その上に付けられていたところには、人間のあらゆる悪と闇が明らかにされています。そこに表れている悪意、ねたみ、憎悪、悪口、あるいは打算、もう制御不能になりました。ですから、人間のいろいろな模様の中で起こることで悪の力が勢いづき、私たちを罠に陥れようとしています。

2B 生活の困難

そして、霊の戦いは生活上の困難でも起こるでしょう。先ほど話した、ヨブの生涯はまさにそれでした。続けざまに不幸が押し寄せました。財産、息子と娘たち、そして自分の皮膚です。それから見舞いに来た友人と、かなり辛辣な論争へと発展しました。皆さんの生活の中でも、自分ではどうしようもない、そしてどうすればよいか分からない状況、というものがあるでしょう。交通事故であったり、病気や怪我であったり、そして自分自身ではない近しい人の病気や怪我、世話などもそうだと思います。

そして自分の周りを見ると、神のこと、イエス様のことに無関心なのに結構、うまく行っています。そして自分が神を信じていることに、虚しく感じる場合があります。「これだったら、なぜ神を信じているだろうか。」という疑いさえ出てくるのです。それが、詩篇 73 篇で学んだことです。「1-3 節 まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。しかし、私自身は、この足がたわみそうで、私の歩みは、すべるばかりだった。それは、私が誇り高ぶる者をねたみ、悪者の栄えるのを見たからである。」

3B 内なる葛藤

そして、霊の戦いは私たちの内なる葛藤にも及びます。私たちは完成された者ではありません。キリストの下さる栄光を目指して、一心に走っている者たちです。ですから、その肉の弱さとの戦いがある、何とかしてそれを克服しようとしています。けれども、できていません。「ガラテヤ 5:17

なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」そして、御霊によってようやく克服したと思っても、今度はさらに醜い部分が、他の領域での肉の部分が見えて、どうしようもなくなってしまいます。

2A ヤハウエの名

しかし、「自分にはどうしようもできない。」と思えた時が幸いへの一歩です。確かに落ち込みます。けれども、そのように弱くなっている時こそ、私たちは逃げる道を知っています。「主の御名」という砦に走って避難することができます。自分がまだできると思っている時は、そこに入るのは何か自分が許せない、自尊心を裏切ることになります。しかし、へりくだる者はただそこに逃げればよい、ということを知ります。そして主にあって強くされるのです。

新改訳の聖書で、太字で「主」となっているところは、ヘブル語では YHVH という子音だけで成り立っているものです。ですから正確な発音が分からず、多くが「ヤハウエ」ではないかと言っています。聖なる神の名ということで、ユダヤ人の人たちは、もう一つの、太字ではない主、「アドナイ(=主人)」と発音して、言い換えています。主はこの名を、族長アブラハム、イサク、ヤコブに現われた神が、モーセに対して、はっきりとご自分が誰であるかを、名前をもって明らかにされました。「わたしは、『わたしはある。』という者である。…イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主(ヤハウエ)が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。(出エジプト記 3:14,15)」

その名の意味は「**～と一つになる**」という意味です。私たちに必要があれば、その必要となってくださるという意味です。イスラエルの歴史を通じて、ヤハウエなる神は、彼らにご自身が彼らの必要になると言って、啓示してくださいました。

1B 「ヤハウエ・イルエ」

主は、アブラハムに試練を与えられました。それは、彼の愛する独り子であるイサクを全焼のいけにえとして捧げなさい、というものです。これまで主ご自身が、「あなたに子孫を与え、それを星の数のようにする。」と言われ、イシュマエルをもうけたものの「彼ではなく、サラから出てくる子がそうである。」と言われました。そして痛みをもって、イシュマエルとその母ハガルを家から出したのです。そして何年も経ち、こんなことを神が言われたのです。神の与えた息子であり、愛する息子ですが、彼と神を取って代えることはできません。神は確かにアブラハムがご自分を畏れ敬っているかどうか、そこを彼にはっきりさせようとしたのでしょう。しかしアブラハムとしては、全くなぜこんなことを言われるのか、その状況が見えません。しかしアブラハムは、「神が言われたのだから、イサクを屠っても、よみがえらせてくださるのかもしれない。」と思いながら準備しました。

イサクに全焼のいけにえのための薪を負わせました。そしてモリヤ山に上がっていきました。イサクが聞きました、「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」するとアブラハムが答えました。「わが子よ。神ご自身が全焼のいけにえを備えてくださるのだ。(創世 22:8)」この「備える」という言葉、イルエというヘブル語ですが元々は、「見る」という意味です。つまり、主ご自身が全焼のいけにえについては見ておられるのだ、という意味です。

そしてアブラハムはイサクを祭壇の上に縛り付け、彼を屠ろうとしました。それを主の使いが止めました。そして、角をやぶにひっかけている雄羊がありました。それを捧げたのです。そして著者モーセはこう解説します。「22:14 そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエ(ヤハウエ・イルエ)と名づけた。今日でも、「主の山の上には備えがある。(あるいは、「見ておられる」)」と言い伝えられている。」主の山の上で、何が起こるかアブラハムには見えていませんでした。しかし、主ご自身が見てくださいました。ヤハウエ・イルエ、主は私たちのために、その状況を見ておられます。私たちが全く分からない、どのような状況が見えない、そのような時に、主がかえって見ておられるのです。

2B 「ヤハウエ・ニシ」

モーセがイスラエルの荒野の旅を率いていたことを思い出してください。道を歩いている時に、体が弱って歩くのが遅くなり、そうした人々が旅団の最後のほうにいました。そこを襲ってきたのが、アマレク人です(申命 25:18)。敵は、信仰の旅をしている人々でその弱っている人たちに攻撃をしかける卑劣な者たちです。

そこでモーセは立ち上がりました。ヨシュアに言いました。「出エジプト 17:9 私たちのために幾人かを選び、出て行ってアマレクと戦いなさい。あす私は神の杖を手にとって、丘の頂に立ちます。」そしてモーセは、手を上げることによって霊的にアマレク人と戦いました。執り成しの祈りです。しかし、手が重くなってきています。彼の手はどんどん下に下がってきました。すると、アマレク人が優勢になってきました。それで、アロンとフルが石を持ってきて、モーセがそこに座り、そしてモーセの手を二人がそれぞれ支えて、彼がずっと手を上げていることができるようにしました。そして、ヨシュアたちは、アマレク人を打ち倒すことができました。

それでモーセが祭壇を築きます。それを「ヤハウエ・ニシ」と呼びました。それは、「ヤハウエは我が旗」という意味です。「主は代々にわたってアマレクと戦われる。」ということです。私たちにも、霊の戦い、信仰の戦い、世との戦い、そして自分の肉との戦いがあります。そして、自分がもう戦えないと思っている時に、この主の御名に逃げてきてください。主が戦ってくださいます。ヤハウエ・ニシ、主が私の旗になってくださいます。

3B 「ヤハウエ・シャロム」

主は、約束の地に入ったイスラエルに試みを与えられました。彼らが主から離れ、バアルやアシ

ユタロテに仕えるようになったからです。そこで主は彼らをミデヤン人の手に渡しました。イスラエル人は、ミデヤン人を避けて、洞穴に隠れたりしていました。収穫の時期になると、彼らはいなごの大群のようにして来て荒らしていきます。彼らは今のヨルダン、またアラビア半島のほうにいる民でしたが、らくだに乗ってこれらの作物を荒らしていました。

そして、彼らを恐れて酒ぶねで、小麦を打っていたギデオンに主の使いが現われました。そして、「わたしはあなたといっしょにいる。だからあなたはひとりを打ち殺すようにミデヤン人を打ち殺そう。(士師 6:16)」と言われました。けれどもギデオンは不安です。なぜこんな小さき者が、マナセ部族のなかでも、自分の分団は小さく、しかも自分は父の家の中でも一番若いのです。彼は、本当に語られているのが主ご自身なのか、不確かでした。そして主がそのことを示すと、ギデオンはこの方が主からの使いであることを知りました。彼は言いました。「ああ、神、主よ。私は面と向かって主の使いを見てしまいました。」

すると主が言われました。「安心なさい(シャロム)。恐れるな。あなたは死なない。(23 節)」そして、ギデオンはそこに祭壇を築いて、そこを「ヤハウエ・シャロム」と名づけたのです。ギデオンは、なぜミデヤン人と戦うのに、こんなに足りない自分を用いられるのか？自分が主に用いられる、主の器となるのに、とてつもない重圧と不安がありました。しかし、主がその安心となくなってくださいました。主ご自身が平安、シャロムとなくなってくださいましたのです。私たちが重圧を受け、職場の中で、家庭の中で主との歩みをしているなかで、また奉仕でとてつもない重責を担わされている時に、どうしようもない不安を覚える時、主が平安となくなってくださいます。ヤハウエ・シャロムです。

4B 「ヤハウエ・ツイドユケヌ」

時はずっと飛び、ユダの国の人々がバビロンによって捕え移される直前のことです。国の中では罪がはびこっていました。そしてエレミヤが何度も警告したのに、彼らは悔い改めませんでした。そしてバビロンが迫っている今、「バビロンに降伏しなさい、そうすればあなたがたは助かる。」という神の言葉を伝えました。すると王や祭司、預言者たちが怒って、彼を穴に投げ込みました。

このように人々の中に悪と不正が満ちていて、神の愛する、また自分自身も愛するユダの民が滅ぼされるのを見ていなければならないとき、その嘆き悲しみの中で主は彼に、ご自身を示してくださいました。「エレミヤ 23:6 その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義。』と呼ばれよう。」主は私たちの正義、「ヤハウエ・ツイドユケヌ」です。ユダの民に正義はありませんでした。しかし、ヤハウエご自身が彼らのために義となくなってくださいました。すなわち、ご自身が彼らの不正のために死なれ、その処罰を受けられ、それで神がご自分の怒りを満たされるのです。この前の節には、「ダビデに一つの正しい若枝を起こす。」とありますが、主キリストが十字架の上でそのことを行ってくださいました。それで神が義であり、神を信じる者も義と認められるようにしてくださいましたのです。

私たちが、自分の周りにもあまりにも罪、不正がはびこっている中で、それを正そうにも正せない、どうしようもない時に、「それでも、主は正義となっていてくださる。」と、主の御名に避難することができます。主が正しい方ですから、その状態を何とかして下さいます。

5B 「ヤハウエ・シヤマ」

そして、エレミヤと同時代に、捕囚の地バビロンにいた預言者エゼキエルがいました。彼は、エルサレムの神殿の中に、忌み嫌うべきもの、汚れがある幻を見ました。そして、主の栄光の臨在がそこから離れていく姿も見ました。そしてバビロンが神殿を滅ぼして、ユダの民が捕え移されます。しかし、主はエゼキエルに、神殿が回復する幻をお見せになりました。それから、イスラエルの民がそこで回復し、土地も回復する幻を見ました。

それでエゼキエル書の最後に、エルサレムの町がこのように呼ばれます。「主はここにおられる。(48:35) **ヤハウエ・シヤマ**です。エゼキエルが、エルサレムに何にもなくなってしまった時、そこが廃墟だけになってしまって、希望がなくなったとき、それでも主ご自身がそこにおられる、となくなってくださいました。これまで大事にしていたものを、失ってしまったことがあるでしょうか？自分がどれだけ取り戻したくても、もう無くなってしまった。しかし、主がその失ったものになってくださいます。ヤハウエ・シヤマ、主がそこにおられるのです。

3A イエスの御名

そして、新約時代に主の使いは、主の御名をヨセフに示してこう言われました。「マタイ 1:21 マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってください方です。」**ヤハウエ・シュア**、「主は救い」です。それが短くなって「イエホシュア」であり、さらに短くなったのが「ヨシュア」です。そのギリシヤ語読みが、「イエースース」すなわちイエスです。ヤハウエが私たちの救いとなってくださいました。イエスという名によって、私たちは罪からの救いを得ます。

罪というものこそ、私たちがどんなに戦っても敗北してしまう重荷です。パウロは、自分の肉の弱さを戦いました。思いの中では善を行なうべきだと思っているのに、憎んでいる悪を行なっている自分がいます。それでがんじがらめになっていて、抜け出すことができません。どうすればよいのでしょうか？彼はこう嘆きました。「ローマ 7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」そしてパウロは続けてこう言うのです。「**私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。(25 節)**」彼は自分の内に全く善がない、自分のもがいている罪から抜け出すことができないとしていた時に、イエスの御名という砦に逃げてきたのです。救いは自分の内にはない、もっぱら神にこそある。ですから、いつも私たちは主イエスの名を呼び求めます。

そして、父なる神は、イエス様が十字架にまで従順であられたので、彼を死者の中から甦らせ、

そして「すべての名にまさる名」をお与えになりました。「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。(ピリピ 2:9)」ペテロが大胆に宣言しました。「使徒の 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」主はこのようにして、ご自分の名を明らかにされ、終わりの時には、イエスという名によって究極の形で現してくださいました。イエス様の名を呼び求めましょう。この方に救いを求めましょう。状況からの救いだけでなく、自分の罪からの救い、すなわち罪の力からの救いを求めましょう。すでに主は、その力をご自身が私たちの内に住んでくださることによって、与えてくださっています。

私たちがどんなにだめだ、と思っていることでも、その苦しみ、罪の戦いもキリストが十字架に至る道で、そして十字架上で果たしてくださいました。猛攻に反発する肉の思い、罪の力に対して、イエスの名によって私たちは対抗できます。最後にヘブル書 12 章 1 節から 4 節を読んで、終わりにします。「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。(ヘブル 12:1-4)」